～別院だより～
モダン寺新聞
第23号
発行所
浄土真宗本願寺派　本願寺神戸別院
〒650-0011
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号
TEL 078-341-5949

一口法話　「のに」より「こそ」

世の中には様々な言葉が存在しています。人の言葉というものには使い方によって色々に変化しますね。人を傷つけたり人を慰めたり。人を責めたり人を誉めてみたりします。色々な言葉がある中で、今回の話では「のに」という言葉と「こそ」という言葉を取り上げたいと思います。「のに」と「こそ」。この二つの言葉は、単独では使われません。言葉の最後に付けられる言葉です。

私がよく聞く会話の中では「のに」が非常に多いです。例として私の周りの「のに」を少し取り上げてみます。

「私がこれだけ働いているのに、少しもいたわってくれない」
「子どもの為にこれだけやっているのに、子どもはわかってくれない」
「親に気を使って色々苦労しているのに、大人はわかってくれない」
「私がこれだけ愛しているのに、相手は全然愛してくれない」などなど、きりがありませんね。

全体を通して見えてくるのは「自分がこれだけの事をしているのに、相手は何もしてくれない」という気持ちであるかと思います。つまり、物事がうまくいかない原因を自分ではなく全ての周りの何かに責任転嫁している姿の現れているのではないでしょうか？

皆さんの周りはどうでしょうか？「のに」という気持ちに気付き、「こそ」に変えていく事が大事なのではないでしょうか。つまり…

「この人が働いてくれているからこそ、今の生活がある」
「この子が生まれてきてくれたからこそ、親にならせていただいた」
「この親があるからこそ、いま自分の命がある」
「この人がいるからこそ、私は人を愛することが出来る」

などなど、気付けば自分の周りにはかけがえの無い人々で一杯であったのです。先ほど周りへの気持ちとは全く違った感謝の気持ちが詰まっています。自分の存在だけでなく周りのかけがえのなさに気付いていくことが大切な第一歩なのです。自分を見つめ直して、まず第一歩進んでみましょうよ。

合掌

奈良教区　葛城南組　光暁寺　太田智昭

第12回「仏教　ここが知りたい」

お供えの捉え方

～命のお恵みをいただく～

ご門徒さんのご自宅へ月忌参りに行かせていただくと、『お仏壇にどのようなものをお供えすればよいですか？』という質問をいただく事があります。そこで今回は、お供え物の心得について述べさせていただきます。

法事等でご門徒さんのご自宅でされているお供えには、何種類もの果物やお菓子、酒などをお仏壇へ供えられている方もおられます。

しかし、お供え物はなにもたくさんすればよいというものではありません。

大事なことは、お仏壇の中は秩序よく、調和のとれたお飾りにすることです。

お供えする物で特に大事にされている物が日本では「お仏飯」です。毎朝ご飯が炊ければ一番にお供えすることになっています。〝仏飯器〟と呼ばれる専用の器に蓮のつぼみ形に盛り、ご本尊の上卓、あるいは仏飯台にお供えします。もし、両方のお脇掛けが御影像なら、その前にもお仏飯をお供えすることもありますが、過去帳や位牌（浄土真宗では使いません）の前には供えるものではありません。

お供えしたお仏飯は午前中にお下げすることになっています。

次にお供物ですが、法事の時などにお供えし、作法の上から①餅②菓子③果物の順に重んじられています。そしてお供えする方法にも作法があります。

供笥・高杯と呼ばれる仏具に相応の量を乗せてお供えしますが、同じ物を対にしてお供えするのが原則です。

その場合、買ってきたお菓子をそのまま供えるというのではなく、袋から適当に取り出し、形よく盛り付けてください。

お供え物の量が多ければ、お仏壇の横か斜め前あたりに台やお盆を用意してみてはいかがでしょう。

要はお仏壇の中のお飾りを乱さないようにすることです。

お供え物というのは本来、仏さまに向けてお供えします。

しかし浄土真宗でのでおあじわいとしては、ご飯をはじめ、私たちが日々暮らしていく上では欠かすことのできない食物を、「命をいただく尊さやお恵みを如来さまからいただいた」と捉えます。

如来さまからのお恵みを感謝して、「そのおさがりを私たちがいただく」と味わいます。

その意味からまた、皆さんが贈り物としていただいた物も阿弥陀さまにお供えする習慣をつけましょう。阿弥陀さまからの〝お下がり〟としていただくというところに普段の生活ではなかなか気付くことのできない、ものの有難さに気付かされていくのではないでしょうか？

重要な点

◎お仏飯はお供え物の第一。
出来れば毎日供えましょう。
◎お供物は仏具にきちんと盛る。
◎量が多ければ横に台を設ける。
◎お供え物は如来さまの恵み。

◇◇◇◇◇ 神戸別院行事レポート ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

春季彼岸会厳修

「お彼岸」や「彼岸会」という場合の「彼岸」は、「到彼岸」の略であり、迷いの世界から悟りの世界へ至るという意味です。

浄土真宗では、悟りの世界（お浄土）へと至らしめて下さる阿弥陀如来さまのお徳を讃え、阿弥陀如来さまのおこころを聴聞させていただく佛縁として大切にしています。

神戸別院でも三月二十日から二十三日までの三日間、「春季彼岸会」を厳修いたしました。

ご講師には京都教区より岡橋聖舟師をお迎えし、「アミダさまとともに」というご講題のもと、阿弥陀さまのおこころをお取次ぎいただきました。

また、彼岸会の中日に当たる二十一日の午前十時より門信徒の集いが行われました。第十五回目となる今回の門信徒の集いは「お寺で落語を！」と題して、お二人の落語家の方をお招きしました。

子ども会 はなまつり

四月七日は仏教をお開きになった、お釈迦が誕生された日です。この日を「はなまつり」と称して、お釈迦様が誕生されたことをお祝いする行事が各お寺でも行われます。モダン寺土曜子ども会でも四月二十二日に「花まつり」を開催いたしました。「らいはいのうた」をお勤めした後、川那部輪番からお話があり、続いて灌仏（かんぶつ）（お釈迦様の誕生仏に甘茶をかけること）を行いました。また当日は、今年度、初回の子ども会でもあることから、はなまつりに先立って「子ども会記念品授与式」が行われ、四月から新たに子ども会に参加する会員の子ども達に、子ども用式章・お念珠・子ども会教材が渡されました。

授与された式章をつけて記念撮影

降誕会おもちつき

毎年の恒例行事となりました「降誕会おもちつき」、この行事は降誕会にお供えするお餅をつく目的で開催されます。今年は五月十九日に行われました。当日の天候は、雨模様となりましたが、別院仏教婦人会の皆様、仏壮の有志のご協力ものと、十二臼ものお餅をつきました。

お餅をつくということ自体、なかなか出来ない今日、経験する機会がなく、大変力が必要な作業であるということを改めて感じさせられました。

宗祖降誕会

五月二十一日は浄土真宗のみ教えを私たちにお示しくださいました親鸞聖人がご誕生された日であります。

京都の本願寺をはじめ、各寺院も降誕会を厳修されます。

神戸別院でも、本願寺と同日の二十一日に宗祖降誕会を厳修いたしました。

午後一時より別院前庭にあります親鸞聖人銅像前にて讃佛偈のお勤め、その後に本堂に移り、正信念仏偈作法第二種をお勤めいたしました。

降誕会は、お念仏のみ教えをお示しくださいました宗祖親鸞聖人のご誕生をお祝いし、私たち自身が遇い難い仏教のみ教えに遇うことが出来たことを尊ぶ大切な法要であります。

ちなみに、親鸞聖人の誕生日は新暦では五月二十一日に当たりますが、旧暦では、四月一日です。

神戸別院行事予定

七月

○第一土曜仏教講座
一日(土)　午前一時三十分より
講師　龍谷大学名誉教授
大阪教区讃良組善宗寺
中垣昌美師
講題　「仏教と福祉」

○別院仏教婦人会定例法座
七日(金)　午後一時三十分より
講師　高砂組蓮教寺
村井丹師
講題　「人間に生まれ
仏法にあえた喜び」

○別院常例法座
十五日(土)・十六日(日)
午後一時三十分より
講師　姫路南組最勝寺
八木顕宣師
講題　「みほとけに
いだかれている私」

八月

○第一土曜仏教講座
五日(土)　午後一時三十分より
講師　平安高等学校前校長
遠山正樹師
講題　「青少年の
凶悪犯罪と仏教」

○モダン寺暁天講座
一日・二日・三日　午後七時から

一日(火)
講師　佐用組浄宗寺
富永真順師
講題　「ゆるされてきく」

二日(水)
講師　神明組慈照寺
藤田眞哲師
講題　「信者になったらおしまいだ」

三日(木)
講師　加古川組普光寺
近藤龍樹師
講題　「お育ての中で」

○盂蘭盆会
十五日(火)
午後一時三十分より
講師　神戸別院輪番
松村彰道師
講題　「いのちのゆくえ」

九月

○第一土曜仏教講座
二日(土)
午後一時三十分より
講師　浄土真宗本願寺派
育成研修部長
中岡順忍師
講題　「人の育成に携わって」

○別院仏教婦人会定例法座
七日(木)
午後一時三十分より
講師　播磨東組妙覚寺
森田直道師
講題　「見えてくるもの」

○常例法座
十五日(金)・十六日(土)
午後一時三十分より
講師　氷上西組西光寺
中尾教雄師

○秋季彼岸会
二十二日(金)～二十四日(日)
午後一時三十分より
講師　大阪教区大阪北組永照寺
深川正延師

新入職員紹介

川崎秀道
(かわさきしゅうどう)

四月一日付で、新しく神戸別院に参りました。出身は富山県です。皆さんどうぞよろしくお願い致します。

法務日誌

日に日に暑さが増し、夏の到来が感じられる季節になってまいりました。皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

モダン寺新聞二頁に掲載させていただいております様な仏事に関する疑問・質問等がございましたら、今後ともモダン寺新聞で取り上げ、答えさせていただきますのでお参りの際にでも遠慮なくお尋ねください。